

私の願いではなく神の御心を

マルコの福音書 14 章 32-42 節

はじめに

今日から受難週に入ります。次主日の「イースター」を待ち望みつつ、イエス様の十字架の苦しみを覚えて、この一週間を過ごしたいと思います。

今日は、イエス様が十字架の苦しみに備えて祈られた「ゲッセマネの祈り」の出来事から教えられたいと思います。イエス様はこの祈りの出来事から 24 時間も経たないうちに、十字架に付けられます。この十字架の苦しみを前にしたイエス様の祈りは、とても激しい祈りでした。まことの神であり、まことの人であるイエス様だからこそ経験した激しい葛藤がそこにありました。それは、自分の願いと神様の御心の中で揺れる激しい葛藤です。

1. 恐れと悲しみを打ち明けるイエス様

イエス様は十字架に付けられる前の日の夜、弟子たちと「ゲッセマネ」という所に行かれました。ここは、イエス様の祈りの場所でした。イエス様はゲッセマネに着くと、弟子たちに「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい」と言われました。そして、そこから弟子たちの中でも、ペテロとヨハネとヤコブの三人を選び、彼らを連れて行かれました。

イエス様にとってこの三人は、弟子たちの中でも特別な存在でした。イエス様は、この三人にしか見せない姿がありました。それは、御自身が「恐れもだえる」姿、また「死ぬほど」の「悲しみ」に包まれる姿です。イエス様は、この三人にだけは御自身が恐れと悲しみを隠すことなく、分かち合われたのです。

2. 自分の願いと神の御心の間の葛藤

イエス様は、この三人に御自身の恐れと悲しみを分かち合われると、今度は父なる神様に恐れと悲しみを分かち合っていかがれます。イエス様はこの三人に、「ここを離れないで、目をさましていなさい」と言われると、「少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るように」「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください」と祈り始められるのです。

(1)「この時が過ぎ去るように」「この杯を取りのけてください」

イエス様はここで、「この時」「この杯」が自分から「過ぎ去るように」「取りのけられるように」と祈っています。「この時」「この杯」というのは、十字架の苦しみのことです。しかしイエス様は、ただ単に十字架の苦しみを恐れているわけではありません。ただ単に痛

みを恐れているとか、死を恐れているわけではありません。

旧約聖書で、「杯」という言葉は、「神様の怒りと裁き」を表す言葉でした。ですからイエス様が恐れていたのは、これから経験する十字架の苦しみが、神様の怒りと裁きを受けるものであったからです。しかも全世界の多くの人々に向けられた神様の怒りと裁きを、ご自身ひとりで受けようとしていたものであったからです。

イエス様は、全世界の多くの人々に向けられた神様の怒りと裁きを、まことの人となられた御自身が、人間の代表として引き受けようとしていたのです。だからこそイエス様は、恐れもだえ、死ぬほどの悲しみに包まれ、これが「過ぎ去るように」「取りのけられるように」と祈られたのです。

本来この祈りは、私たちが祈るべきものでした。私たちが神様の怒りと裁きの前に、恐れもだえ、死ぬほどの悲しみに包まれ、これが「過ぎ去るように」「取りのけられるように」と祈るべきでした。しかしイエス様は、私たちの代わりに恐れもだえ、死ぬほどの悲しみを経験し、私たちに向けられた神様の怒りと裁きを身代わりに受けるため、十字架へと向かってくださったのです。

(2)「わたしの願うことではなく、あなたのみこころをなさってください」

イエス様は父なる神様に、「この時が自分から過ぎ去るように」「この杯をわたしから取りのけてください」という自分の気持ちを正直に分かち合われました。しかしイエス様は、その後「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころをなさってください」と祈り、御自身を神様の御心に従わせていかれるのです。

今日の聖書箇所を見ると、イエス様はこのゲッセマネで三回祈られました。37節を見ると、一回の祈りが一時間であり、39節を見ると、イエス様は「**同じことばで祈られた**」とありますから、イエス様はこの時、三時間ほど祈られたのです。

その中でイエス様は、御自身の恐れと悲しみを父なる神様に分かち合わせ、御自身の願いと神様の御心の間で葛藤し、ついに神様の御心に御自身を従わせていかれたのです。これは、まさに祈りの格闘です。ルカの福音書には、イエス様はこの祈りの時に、「**汗が血のしずくのように地に落ちた**」とあります。イエス様はまさに、体が消耗しきるほど激しく祈られたのです。

(3)本当の祈りとは？

祈りというのは、自分の願いを神様に訴えるだけのものではありません。そうであれば、他の宗教や未信者の祈りと何も変わりません。クリスチャンの祈りは、神様の御心に自分を従わせていくものです。祈りは、神様の御前に出るものです。神様の御前で静まるものです。祈りは、神様の御前でひたすら自分の願いを訴え続けるものではありません。神様の御前で静まり、神様の御言葉を思い巡らし、神様の御心へと自分の心が整えられていくものです。私たちは祈りの中で、神様を動かそうとしますが、本当の祈りは、祈りの中で

私たちが動かされ、私たちが変わられていくものです。私たちは祈りの中で、神様の御言葉による語りかけにも耳を傾けなければなりません。それは、いわゆる“お告げ“のような怪しい神秘的なものではありません。そうではなく、心に蓄えられた聖書の御言葉による聖霊の語りかけです。その中で私たちは、自分の願いと神様の御心の間で心が揺り動かされ、神様と祈りの格闘が始まるのです。そしてその祈りの中で、神様の御心に自分を従わせ、神様の御心こそが自分の願いへと変えられていくのです。

イエス様が私たちに教えてくださった祈りの模範である「主の祈り」も、まず神様の御名があがめられ、神様の御国が来るように、神様の御心が行われるようにと祈るようにと言われています。そしてその後に、私たちの必要な食べ物を与えられるように、私たちの罪が赦されるように、私たちが誘惑から守れるようにと祈るようにと言われています。

私たちの祈りは、自分の願いではなく、神様の御心をまず第一に求めるものです。さらに言うならば、祈りの格闘の中で、神様の御心こそが自分の願いへと変えられていくものなのです。

(4)祈りの格闘の経験を！

しかし私たちは、神様の御心を求めつつも、自分の正直な気持ちと願いを、神様に打ち明けることもまた大切なことです。イエス様も、御自身の正直な気持ちと願いを、父なる神様に打ち明けられました。私たちは、「御心の通りになりますように」という一言で片づけてしまってはなりません。自分の正直な気持ちと願いを神様にぶつけなければ、神様の御心との真実な葛藤は生まれません。真実に神様の御心を自分の願いとし、神様の御心に従わせていくためには、自分の正直な気持ちと願いを神様にぶつけ、神様の御心との格闘をしなければなりません。

皆さんは、自分の正直な気持ちを神様にぶつけているでしょうか。それと同時に、聖書の御言葉による聖霊の語りかけに耳を傾けているでしょうか。神様の御前に静まって、祈りの格闘を経験しているでしょうか。自分の願いと神様の御心の狭間で葛藤し、神様の御心に自分を従わせていく経験をしているでしょうか。ただ一方的に神様に願いを訴えるのではなく、「御心のままに」という一言で片づけるのではなく、祈りの格闘の中で、神様の御心こそが自分の願いとなっていくプロセスを経験しているでしょうか。

祈りは、自分の願いへと神様を動かすのではなく、私たちが神様の御心へと動かされていくものではないでしょうか。イエス様のゲッセマネの祈りは、そのような祈りでした。

(5)共に祈る仲間を！

イエス様は、自分の願いと神様の御心の狭間で葛藤し、祈りの格闘をしようとする時、三人の弟子たちには、御自身の恐れと悲しみを隠すことなく、分かち合われました。そして、「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい」と言われました。私たちは、神様の御心を求めて祈ろうとする時に、自分ひとりで祈るのではなく、親しい信頼できる数人の

兄弟姉妹に、自分の正直な気持ちを分かち合い、共に祈ってもらうことも大切なのです。イエス様ですら、三人の弟子たちに共に祈ってもらおうとしたのですから、私たちはなおさらではないでしょうか。私たちが真剣に神様の御心を求めて祈ろうとする時には、共に祈ってくれる仲間が必要なのです。

おわりに

しかしイエス様の三人の弟子たちは、イエス様が祈りの格闘をしている間、残念ながら眠っていました。三人の弟子たちは、イエス様と共に祈ることができなかったのです。

イエス様は、祈りの格闘に向かうたびに、三人の弟子たちに「目を覚ましていなさい」と言われました。この「目を覚ましていなさい」という言葉は、イエス様が世の終わりについて語られる時に、よく使われる言葉です。

イエス様が祈りの格闘から帰って来られた時、三人の弟子たちは眠っていました。この姿は、イエス様が世の終わりにもう一度この地上に帰って来られる時の私たちの姿かもしれません。私たちは、イエス様が世の終わりに再び来られる時に、眠っていてはいけません。イエス様は、「目を覚まして、祈り続けなさい」と言われます。

イエス様が世の終わりに再び来られる時、最後の審判が行われ、私たちの救いは完成します。私たちはそれまで、この地上で神様の御心を行なっていかなければなりません。多くの人をイエス様の救いへと導き、私たちはイエス様の弟子として成長し、教会をキリストのからだへと建て上げていかなければなりません。この地上で神の国を進展させなければなりません。私たちは眠っていてはいけません。目を覚まして、祈り続けなければならないのです。祈りの格闘の中で、神様の御心に自分を従わせ、この地上で神様の御心を行ない、神の国に仕えていかなければならないのです。

イエス様は祈りの中で、十字架の死にまでも従っていかれました。皆さんがこの地上で負うべき十字架は何でしょうか？ひとりひとりが十字架を負いつつ、イエス様が再び来られる時を待ち望んでいきたいと思えます。